

教育の歩み（その1） 学校誕生への道

柿生郷土史料館専門委員 小林 基男

- ☆ 「学校」が、今のような姿になったのはいつか？
 - 今のような姿とは？ 我々の答えは、同一年齢の集団で学級（クラス）を構成し、年齢が上がると共に、学年が上がってゆく、学年・学級制の下で、仲間と共に勉強する仕組み
 - こうした学校や学級が誕生したのは、最も早い国で19世紀半ば過ぎ。日本では明治時代の後半になってから（というのは、19世紀の最晩年～20世紀にかけて）の短い歴史しか持っていない。

- ☆ 現在でも、教育は、学校と家庭と地域（社会）の3者が連携してこそ、完結すると3者の連携の大切さが強調されますが、歴史上最初に登場した教育主体は社会であり。社会教育が最初の教育期間でした。学校はまだないし、現在のような意味での家族もまだ存在しなかったのですから…

- ☆ では、学校の起源は？
 - 良く知られるのが、英語の school はここから生まれたと言われる、ソクラテスのスカラの森での青空教室の存在。時期は紀元前5世紀の後半
 - 中国春秋・戦国時代に活躍した諸氏百家（孔子は紀元前6世紀の後半）の思想家、戦略家が所説をたて、弟子に教え、諸侯に厚遇された。春秋時代の末期には、学堂を構えて迎えられる思想家、計略家も出てきた。その思想の範囲は広く、孫氏のような兵学を講ずる者も登場（→孫氏の兵法）

- ☆ ギリシャ哲学や孔子・孟子・墨子・荀子等諸氏の教えは、文字に記されて残されたので、今日に伝わった。 → 文字は何故生まれ、普及するようになったのか？
 - 文字の効用とは何か？
 - 文字誕生の前に、人は言葉を発明しました。言葉は意思伝達的手段として生まれ、人の知能の発達や、それに応じた感情表現の蓄積によって、単なる手段から一つの文化にまで成長を遂げました。ここに自分たちの言葉（言語）を守り、維持することは決して放棄してはならないことになりました。自分たちの言葉を失った民族は、自らのアイデンティティを失い、やがて忘れ去られるという滅びの道を歩むこととなります。
 - ただ言葉は、周囲の人が話す言葉を聞いて、比較的 naturally 誰もが覚えます。それに対して、人の発した言葉を記録するために生まれた文字は、かなり訓練しないと、自由に読んだり、書いたりすることは出来ません。最近では、初等教育が普及し、日本国憲法は、その第26条に、親は子に教育を受けさせる義務を負うと明記しているほどですから、初等教育の普及は眼を見張るものがあるのですが、いわゆる庶民の

識字率（読み書き能力）は、ほとんどゼロの時代が長かったのです。

読み書き能力は、一部の特定の人たちにだけ必要とされた。

- ☆ 文字は支配階級にとって欠かせない、支配に必要な手段の一つとして生まれた。
 - 「眼には眼を、歯には歯を…」で知られるハムラビ法典をご存じの方は多いと思います。
 - 現存している法はわずかですが、紀元前の時代から、各地に法が存在したことは、後の時代の記録から明らかになっています。

文字は、権力者の定めた「掟」を周知するために必要とされたのです。
数字はどうでしょう。数字は年貢徴収のために必要とされた。
やがて商いに欠かせぬ手段として、利用が広がる。

- ☆ ところでギリシア世界、→ ポリス（小さな都市国家の集合体）いわば小国家分立の時代という歴史の段階にあった。代表的なポリスがスパルタとアテネ。

この内アテネで文字文化が栄え、ギリシアの歴史はアテネが残した記録で、他のポリスの状況も分かる。

 - 一方、スパルタは軍事国家。文字は人間を軟弱ぬするからと、文字は必要なしとして使用しない。市民団の団結を優先して、貧富の差が生じないようにと、貨幣も使わない。子どもは7歳になると男女とも学校へ。男児は寄宿舎で共同生活。13歳までの7年間。女子は親元から通う通学生。
 - 学校と名がついているが、カリキュラムは多くが軍事教練。優秀な兵士を育成するための基礎訓練。体育、体育、体育の日々。

女子の教育も、丈夫な兵士を生むための訓練に、音楽とダンスが少々。
どちらも、読み書き訓練が一切ない、特異な存在だった。

- ☆ 日本ではどうだったのか。

朝鮮半島経由で、中国文字が入ってくる。文字は漢字を利用した。

 - 発見された日本最古の文字 → 4世紀の刀剣類に記された文字。
 - 日本を中国や朝鮮のような律令国家にしていくためには、優秀な人材を現地に送って、学んで来てもらわなければならない。これが厩戸皇子から始まる遣隋使、遣唐使の派遣となる。
 - 有名な「日出処の天子、書を…」と綴ったとされる親書、実際にこの通り書かれていたとしたら、皇帝に取り次がれることは100%ありえない。日の出、日の入りの例えではなく、天子の語がアウト。天が認めた天子は、隋の皇帝ただ一人。周辺の小国は、朝貢すれば属国として認め、面倒を見てやる。そういう存在。頭を低くして朝貢し、願い出れば留学生と言えども受け入れて保護し、面倒を見てやる。
 - 当時の日本には、次代の支配層を育てるための高等教育機関がなかった。そのため、大海を渡る危険を冒しても、前途有為な若者たちを留学生として送り出す決断を下さざるを得なかった。この決断は、多くの犠牲を払いながらも、大きな実を結ぶことになった。

→ 以後、遣隋使、遣唐使合わせて、回数は不明ながら、20回近く、留学生を送り込み、律令体制や仏教の学びを続け、日本の律令体制の整備や仏教の発展に寄与。

「大化の改新」と呼ばれるクーデタは、中国の政治体制に対する理解の深まりがあつて、初めて可能になったクーデタ。そして701年の「大宝律令」の制定もによって律令国家への脱皮が出来たのも、帰国した留学生の活躍と、その弟子たちの存在抜きに語ることは出来ない。

→ 後日談 遣唐使の派遣は894年に廃止。唐の国力が落ち、内乱が続いていて、かつてのような成果が期待できず、大海を渡る危険を冒すに値する見返りが期待できなくなったことが大きい

☆ 「大宝律令」の公布が意味する事 → 律とは刑法を意味し、社会規範を定めた。令は律にはない社会制度に関係する行政関係を定めていた、いわば今日でいう民法と行政法に関する定めであった。後年両者を補う細則として、格と式が定められた。

→ 律令法制が定められたとはどういうことか？ 律は全6巻、令は全9巻からなる大部な法である。都に1冊あるだけでは、支配下にある諸地域に周知できない。

律令は、手書きで筆写されて、支配下全地域に届けられなければならない。律で定められた国司の元に1冊贈るだけでも、相当な数になる。国司の下で、地方の有力豪族が郡司として、配下の大家族をいくつも抱えている。彼らにも周知が必要（地方の国司が、律や令を筆写できる能力のある役人を抱えていたとは思えないから、この分も中央で用意する必要がある）。都の役人に周知するにしても、部局の執務室に1冊づつは必要。大変な量の律令を筆写しなければならない。

→ 今日分かっているのは、公布された701年には間に合わず、702年中におよそ4割の地域に中央の官吏が使者となって4割の地域に届け、残りの地域に送達し終わるのは、703年の年末だったということ。

→ 相当数の書き手が、毎日毎日筆写し、間違いがないかどうか確認し、1字の間違ひも許されない（1字間違えただけで、意味が全く違ってしまうこともありますので、特に法となると、これは絶対に許されません。それだけに気に重い辛い仕事でした）作業を続けた。

→ 法の制定とは、こういうことでした。遣隋使、遣唐使の派遣はこうして結実していったのです。

☆ 仏教道場の建設 → 空海と最澄

→ 比叡山の延暦寺、高野山の金剛峯寺は、共に人里離れた深山の山岳道場。

いわば神学の大学としての機能を持って建立された仏教寺院。

→ 日本の高等教育は神学から始まったと言える。

→ 753年鑑真大和上渡日、以後亡くなる763年までの10年間、朝廷の伝戒の師を務め、天皇はじめ多くの朝廷人に戒めを授けた。唐招提寺が建立された後半の5年は同寺で、前半5年は東大寺に起居した。

- ☆ 教育機関の誕生 → 文字は支配者にとっての必要から普及していく。支配の手段文字を自由に読み書きできるものの養成が必要。そのたの教育機関は、次代の支配者の養成という形で始まる。
 - それゆえ、最初に誕生するのは高等教育機関。大学が真っ先に誕生する。日本でいえば、大学とは名乗らなかったが、高野山と比叡山の山岳道場が最初の大学。
 - 中国では、唐代に始まる科挙の制度。科挙（高等文官試験、進士科の受験など）ここに合格しないと高級官僚になれない。そのため、科挙を受験する学力を身に着けるための学校が出来る。これが事実上の大学。
 - ヨーロッパでは、ローマカトリックを基盤とした神学中心の大学と、世俗領主や大ブルジョワを基盤とした法学中心の大学という二つの系統がある。しかし、やがて前者も法学部を作り、後者も神学部を設置して両者は融合する。当時の支配の手段として、法と宗教が利用されたことが良く分かります。自然科学が未発達時代にあっては、自然現象は神の技であると信じられていた。

- ☆ 歴史の古い西洋の大学の特徴 → いずれも、いつ創立されたかがはっきりしない。創立記念日が分からない。
 - 大学が、学生たちや教授たちの職能団体（当時の言葉でギルド、日本近世の座がこれに近い）として誕生したから。
 - 推定になるが、おそらく1150年前後にパリ大学が誕生、前後してイタリアのボローニャ大学、オックスフォード大学、プラハ大学などが次々に誕生します。
 - こうした大学の一つ一つに学生や教師の団体（ギルド）が生まれ、12世紀末から13世紀初にかけて、国王から団体としての特許状を付与されるのです。こうした大学の中で、ボローニャ大学は、学生の要望で法学中心の構成をとり、ローマ法や教会法の権威を欧州各地から集めた結果、各地に評判が広がり、各地から学生が集まります。そのため学生の宿所が不足するようになり、味を占めた市民たちが、学生の弱みに付け込んで、頻繁に家賃の値上げを繰り返すようになります。困った学生たちは、職能団体の機能を最大限活用して、学生組合の名で適正家賃への値下げを要求して、ボローニャの都市当局との交渉に入りました。交渉は、学生組合の圧勝に終わります。ここに当時の大学の特徴がありました。大学に校舎はなく、講義は、教会の回廊とか、教会や市庁舎前の広場とか、適当な空き地があればどこでも行われたのです。学生たちは、要求が認められないなら、我々はボローニャを退去し、別の地に移ると宣言したのです。教授の給与は、講義を聞きに来る学生から徴収する1回いくらの授業料で賄われていましたから、教授たちも、学生と共に移動します。こんなわけでボローニャ当局は、学生の主張を認め、欲をかいた市民たちも、学生に去られては困りますから、家賃を当初の額に戻したのです。
 - ところで、大学の教員。当初は資格などなく、誰でも講義を始めることが出来ました。カリキュラムもありませんから、開講する科目名を張り出し、いつどこで講義するかを予告して、学生が勝手にやってくるのを待つのです。学生の気を引くこと

に成功すれば、講義は続き、つまらないとソッポを向かれれば退場する。それだけのことだったのです。講義料は1回いくらのシステムでした。

- パリ大学をソルボンヌと呼んだのは、ソルボン司祭なる人物が、貧しい学生のために、学寮を自費で建設してパリ大学に寄贈したことから、大学がこの学寮にソルボンヌと名付けたことに由来します。学寮の前で行われた講義が次々に評判となり、評判の高い教授たちが次々に、ここでの講義を開港したので、他からも多くの学生が集まり、パリ大学といえばソルボンヌと呼ばれるようになったのです。
 - 教授たちも、講義の質を高めて多くの学生が集まれば、状業料収入も増えることに着目して、教授団体への入会に、相応の審査を加えるようになります。ギルドの親方になるには、試験に合格しなければならなかったのですから、これも当然と言えば当然です。尊敬できる師を求めて流動する学生を繋ぎとめるには、優秀な教授を1人、2人ではなく、多数揃えることが効果的です。そこで、同業者の質を保つために、厳しい資格検査を課すようになったのです。
- やがて学生たちの中からも、教授を目指すもの。或いは教授資格を持つことで宗教界での地位向上を目指すものなどが出てきて、教授資格の付与・認定が教授組合の権威を高めることに繋がってゆきます。

☆ ラテン語の習得 → 修道院（聖職者の修業の場）も司教座教会も、そして大学も使用言語は全てラテン語（古代ローマ帝国の言語）。どこで修得するのか。

- 初等教育の学校はない。エリート予備軍は全て家族または家庭教師に教えられる。
- 聖職者であっても、村や町など、末端の教会の司祭には、ラテン語のできない人がほとんど。彼らは、現地の地域言語の読み書きがやっとできた。彼らは地域の修道院で、見習いの人たちから、現地の言葉の読み書きを教えられた。当然ラテン語やギリシア語の聖書や経典は読めない。教会での説教はどうするか。簡易な説教書が作られ、ラテン語の聖書の一文に、現地語のルビが付けられている。この現地語を読み、隣のページに現地語で書かれた説教をそれらしく語る。村や町の司祭はこんな感じだった。教会幹部も、勢力圏を広げるためにこうしたことを黙認していた。
- カトリック教会は、聖書を修道院と司教以上の幹部聖職者で独占することで、自分たちの権威を保っていた。
- そんな状況が変化を見せるのが、13世紀以降の都市の発達の結果、手工業の親方や商人たちが、仕事に必要なだからと読み書きと計算を学べる初等教育の場を強く求めてきたことでした。教会も住民サービスの一環として受け入れないわけにいかなくなったのです。
- 大学都市では、比較的貧乏な学生たちが、アルバイトとして先生を務める教室が（会場はギルドの集会室）開かれ、職人や徒弟が学んだのです。徒弟もお使いに出た時に、メモしたり、数字を控えたりすることが必要だったのです。
- もう一つ、安息日の日曜日。大人も子どもも教会で祈りを捧げます。礼拝の後、子ども達対象の日曜学校が開かれるようになり、簡単な歌を教えられ、その歌の歌詞を現地語で記した紙を見せられ、何度も繰り返して覚えるのです。一回では無理でも一か月も続けると、覚えることは可能です。簡単な言葉をこうして読むことが出来るよ

うになるのです。良く「歌うように読む」と言われるのがこの状態です。書くことまでいかないのですが、これだけでも進歩でした。状況が劇的に変わるのは、印刷術の発達と、宗教改革の開始にありました。

☆ 活版印刷術の衝撃

- グーテンベルクの活字印刷には、鉛鑄造の活字、油性のインク、木製の平圧式印刷機が必要でした。彼以前の書籍は、全て筆耕による書写で作られた。従って大変高価だった。大学の誕生と発達で学生が増え、書物の需要は大きく膨らみます。大勢の筆耕職人を抱えた書籍商も出てくるのですが、本が高価であることは変わりません。
- そこに登場したのが活字印刷です。活字を組んで印刷すれば、一度に100部から200部印刷できるのです。紙の手配がたいへんな苦勞でしたが、『グーテンベルクの聖書』が、今までにない格安の値段で出された時は大歓迎されたのです。それからおよそ40年。15世紀末にはドイツだけで、52都市に印刷工房があり、欧州全体では245の都市に印刷工房が存在する活況を呈したのです。ルターの改革の始まりとされる1517年には、さらに増えていたのでしょうね。

☆ 宗教改革と地域語教育の普及 → ルターやカルヴァンの改革とは

- 聖書解釈をめぐる教義上の対立。こうした対立は古くから存在する。しかし、ルター以前の対立は、全て敗れた方が異端として片づけられ、闇に葬られていた。それがルター以後は、広く広まらなかった教えであっても、歴史に名を残せるようになった。それはなぜか。
- 活字印刷のおかげで、主張を印刷して広く伝えることが。可能になったから
- ルターの場合。彼はローマ教会に贖宥状の件で、論争を申し込んだ。広く世界にアピールする気はなかった。ところが、大学の礼拝堂に張り出したので、多くの人が見ることになり、これは儲かると考えた書籍商が、直ちに学生を使って、ラテン語を地域言語に訳し、印刷して売り出してしまった。話はあちこちに伝わり、欧州各地に数日のうちに知れ渡ってしまった。
- ローマ教会は、闇に葬ることは出来なくなった。贖宥状への批判から、公然とルターを支持し、彼を保護するザクセン公のうな大領主も出てきた。ルターはその後聖書を現地語に完訳している。

☆ 出版物の利用 → 16世紀前半 印刷物の効用に気付いたプロテスタントの圧勝。

- カトリック側は出遅れ。出遅れに気づいて、16世紀後半の対抗改革を始め頃から、印刷物の効用に気づき、こちらも使いだす。
- 信仰心の厚い人たちは、現地語の聖書を自分で学びたいと、文字の習得意欲に目覚める。こうして学びの場への意欲は飛躍的に高まる。
王権もまた、自領の言葉の使用範囲を広げることに熱心になる…